

## 深川（ふかがわ）製磁の歴史と理念

深川製磁はその歴史と伝統に大きな誇りを持っている。深川家が磁器生産を始めたのは1650年のことで、その後、深川忠次（ふかがわちゆうじ）（1871～1934）が1894年に会社を設立した。忠次は八代深川栄左衛門（ふかがわえいざえもん）（1832～1889）の次男として生まれた。栄左衛門は、こちらも有田の主要窯元である香蘭社（こうらんしゃ）の創設者である。香蘭社が工業品としての陶磁器に注力していたことに満足できず、忠次は会社を離れ、デザインや技術を前面に打ち出した美術品を作ることにした。そして海外市場で人気を博し、深川製磁が作った一対の大花瓶は、1900年のパリ万博と1904年のセントルイス万博でどちらも金牌を受賞した。

1910年、深川製磁は磁器のテーブルウェアの納入者として宮内庁御用達に任命された。この任命は、欧州各国の王室が出すロイヤルワラントと同様のものである。作られてから数百年もたつ骨董の器は、今でも公式のイベントで使われている。必要に応じて、深川製磁のような御用達に交換や追加が依頼される。現代の職人たちは、このような骨董品の形、デザイン、色、重さに正確に合わせなければならない。当時と同じものを作るため、元の型や技術をできる限り用いている。

現在、忠次の四代目と五代目が率いている深川製磁では、主に日常用のテーブルウェアや装飾品など、3,000以上の製品を生産している。2021年1月時点で、所属する職人のうち6名は、一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会により伝統工芸士として認定されている。事前に要望をすれば、施設の見学ができる場合もある。